

万人幸福の葉を読む

— 目次

プロローグ 1

第一部 新世の発見

序文に秘められた信念 16

目次の味わいかた 22

「新世」の開拓 31

万人の希望 38

道は一つ 48

常に正しい 55

大自然と赤信号 63

第二部 万人幸福の栞

1条 今日是最良の一日、今は無二の好機 75

- 2条 苦難は幸福の門 84
- 3条 運命は自らまねき、境遇は自ら造る 94
- 4条 人は鏡、万象はわが師 104
- 5条 夫婦は一对の反射鏡 113
- 6条 子は親の心を実演する名優である 121
- 7条 肉体は精神の象徴、病気は生活の赤信号 130
- 8条 明朗は健康の父、愛和は幸福の母 142
- 9条 約束を違えれば、己の幸を捨て他人の福を奪う 155
- 10条 働きは最上の喜び 165
- 11条 物はこれを生かす人に集まる 175
- 12条 得るは捨つるにあり 189
- 13条 本を忘れず、末を乱さず 198
- 14条 希望は心の太陽である 208
- 15条 信ずれば成り、憂えれば崩れる 217

第三部 真人生の成就

16条 己を尊び人に及ぼす 226

17条 人生は神の演劇、その主役は己自身である 234

(1) 道義の革新

(2) 死は生なり 279 246

あとがき (初版) 330

あとがき (改訂版) 334

装丁 田中 孝和
本文設計 山口真理子

プロローグ

人間の生活法則である純粹倫理を唱導した丸山敏雄（一八九二～一九五二）は、晩年に信じられないほどの精力を傾注して書物や論文を著わしました。そのどれもが純粹倫理のテキストといえるのですが、なかでも『万人幸福の葉』（以下『葉』と略記することもあります）は、みずからが意図して純粹倫理のエッセンスを集約すべく書かれたものですから、基本中の基本テキストにほかなりません。

本書は『万人幸福の葉』を繙いて、その文字文章を味わい、著者の意図を的確に汲み取りながら、純粹倫理の理解を深める手引きをしたい、との思いをもって著わすものです。『葉』のような書物は、あまり理屈っぽく、窮屈に構えて読むものではありません。読みながら、ハッと気がついてメモしたり、「そうだな」と実感したり、深く反省させられたり、感動したりする心の動きを大切にしようとするような読み方が望ましいでしょう。

『葉』の文字や文章そのものの中に、なにかが在るのではありません。読者の内にすでに在るもの（あえていえば「いのち」の威力である「たましい」）が、書物の文字や文章に触発され

て動き出すのです。

その「たましい」の発動を確認しつつ、よりよく生きるための実践に生かすことができたらならば、読者は古典としての『万人幸福の栞』を十分に読んだといえるでしょう。

あらかじめお断わりしておきますが、本書では『栞』の本文の語句や内容を冒頭から順次解説していく形式は採りません。それについてはすでに丸山竹秋著『万人幸福の栞・解説』（以下『栞・解説』と略記）の中で詳しく行なわれています。

本書は一般的な解説ではありません。『栞』の本文を注意深く読み込みながら、丸山敏雄の考えや思いに迫り、『栞』に示され託されている生きた倫理（純粹倫理）のポイントを抽出し、それに現代的な解釈を加えることを第一に心がけます。いままで気づかず、指摘もされていなかったいくつもの発見をお伝えできるようにしよう。

もともと『栞』は誰が読んでもわかるように、平易な文体で書かれています。ところが著者の意図や書かれている内容を十分に理解するのは容易ではありません。そして深遠な哲理に裏打ちされているだけに、汲めども尽きない新味があります。本文を味読し、奥底の思想にどこまで肉薄できるか、これから皆さんと共にチャレンジしてみましましょう。

『栞』の内容をもっと細部まで勉強したい方は、前掲『栞・解説』を強力なパートナーと

して、座右に置いてください。そこで解説されている事柄についてはほとんどりあげません。ただしこの解説書には、『栞』の主要な十七カ条の部分（第二部）以外はほとんど扱われていません。本書では、その省略されている部分（第一部と第三部）も読む対象としてできるだけだけの解説も行なっていきます。

「よむ」ということ

かつて筆者が文科系の学生として学究生活を送っていた頃、とくに大学院に在籍中の七期間は、書物と過ごす毎日でした。もっぱら中国や日本の古典をテキストにして、初期の頃のゼミ（演習）では教授や先輩からずいぶん鍛えられたものです。いまではそれも楽しい思い出となりましたが、書物を「よむ」ということがどれほど大変な作業であるか、大学院に進むまでは知り得ませんでした。

当時は専攻した分野が哲学とか倫理学でしたから、まずテキストに込められている思想を論理的に（知的に）探ることが「よむ」ことの第一のねらいでした。しかし相手が文学作品になると、それとは違った（よみかた）があります。知性よりも感性や情緒を優先させて作品に飛び込むことを優先させます。また、新聞や雑誌の記事に対しては、忙しいと

きなど活字を斜めに飛ばして「よむ」こともあります。

一般に「よむ」は「読む」と書きますが、「読」とは本来、一語一句ごとに短い休止を入れつつ文章を受け止めることをいうので、「流し読み」とか「飛ばし読み」などと表記するのは本当はおかしいのです。文字や文章を目で追いながら、作者と自分を対峙たいじさせつつ、心の白歯そしやくで咀嚼し、吟味し、深く味わうところまでいかなければ、ほんとうに「読む」ことにはなりません。

中国や日本には、昔から訓詁学くんこがくという学問がありました。「訓」は難解な語句をわかるようにほぐすこと、「詁」は古い言葉です。訓詁も「よむ」行為にほかならないのですが、訓詁学では文章の内容や著者の思想についてはほとんど吟味せず、字句の注釈だけを行なってきました。字句が正しく解釈できなければ内容や思想の吟味もできないのですから、この学問も必要だったのです。

さらに詩歌に対しては、声を長くのばしてうたうように「よむ」ことを「詠む」といいます。暗記した文章を声に出して「よむ」ことは「誦む」と表わします。文字を目で追うだけでなく、声に出すのも「よむ」となみの一部をなすことは、日常あまり意識されていません。

ずいぶん細かいことを申し上げましたが、一口に「よむ」といってもいろいろな（よみかた）があることを知っておいていただきたかったです。

以下の本文中では「よむ」を「読む」と表記しますが、「読」だけでも、多読・乱読・再読・通読・味読・朗読・耽読・精読・愛読・黙読・速読・熟読・講読・素読・心読……と、さまざまな読み方があるのには驚かされます。

古典としての『万人幸福の葉』

『葉』はわずか百六十頁ほどの小品でありながら、さまざまな読み方に耐える「質」を有しており、一筋縄の読み方ではその真価が見出だせない本です。古典というのは、本来そうしたものではないでしょうか。

「えっ、『万人幸福の葉』が古典だって?」

このように『葉』を古典と呼ぶことに抵抗感を抱く方があるかもしれません。一般に古典といえば、『古事記』とか『論語』とか『源氏物語』を連想するのが常でしょう。昭和二十四（一九四九）年に刊行された『葉』がどうして古典なのか、疑問を抱かれるのも当然だと思います。

しかし『栞』は古典である、とはつきり申し上げましょう。

そもそも古典とはどういう書物をいうのか、幾人かの知友に尋ねてみました。

「ずっと昔に書かれて、いまでも比較的よく読まれている本のことかな……」

「古い時代の作品であるにもかかわらず、現代人にも何か共感をよぶものを持っている本ではないかしら……」

尋ねた人たちからは、それらとほとんど同様の答えが返ってきました。いずれも間違いではないし、その通りだと思えます。しかしより厳密に考えてみると、「昔」とか「古い時代」とはいつのことなのか、「よく読まれている」とか「共感をよぶ」ものとは何かが曖昧なままです。

以前、古典について考えていたとき、政治学者として高名な丸山眞男の『文明論之概略』を読む』（岩波新書）の次の一節から大きな示唆を受けました。

古典をクラシックの訳語とするならば、そこで核心的な観念は基準とか範型とかいうことであって、時代的な古さは少なくとも第一義的な意味を持ちません。

すなわち、ある書物の中に、なんらかの基準とか範型を備えていることが、古典の第一条件だということです。もちろん、一定期間の風雪をくぐらなければ、基準や範型は確立しませんから、出たばかりの新刊書が直ちに古典になるわけではありません。丸山眞男の言葉をヒントに、古典について以下のように考えたらどうでしょうか。

——人間は文化を創出しうる唯一の生き物です。ただ自然のままに、自然に従って生きるだけではありません。知恵をはたらかせ、創造力（あるいは想像力）を駆使して、自然にはたらきかけ、何かをつくりだしながら、生の充実を求めてきました。料理でも建築でもファッションでも音楽でも絵画でも、人間によって「いのち」の産物として創出されたものは、すべて文化です。

そうした文化は、時代や風土や民族などを背景にした一定の「のり」（基準）や「かた」（範型）をおのずから有しています。それを見出すことができないような作品は、古典と呼ぶに値しません。芸術の場合は、ある文化の「のり」や「かた」を打破して、新たなスタイルを生み出すところに、創作の生命があるといえましょう——

『栞』はいわゆる芸術作品ではありませんが、読んでいると文化の「のり」や「かた」をはつきりと見出すことができることから、まぎれもなく古典だと思います。そして旧来

の道義における「のり」や「かた」を打破すべく書かれたこの書物は、芸術にも通じていると言えるでしょう。

古典を読むことは、歴史を学ぶこととよく似ています。昔は歴史書を「鑑(かがみ)」と呼んだように、歴史を学ぶのは知識や教養を増すことよりも、過去の出来事を鑑(鏡)として照らし合わせ、現代に生きる自分という存在を知り、自分を磨くためです。古典を読むのも、作品に現れた文化の「のり」や「かた」と触れ合い、著者という人間と出会いつつ、結局は自分を知り養う営みにほかなりません。

『万人幸福の葉』の読み方

『葉』はいわば人生の指南書です。このような書物を本当に活かして読むために、ぜひ次の三つの事柄を心得ておきたいと思えます。

第一に、先入見をできるだけ除くこと。

まったく知らない相手であればともかく、私たちは書物や著者についてなんらかのイメージや思いを抱いているものです。

たとえば著者について、その生涯や業績を知れば知るほど、人物イメージは深くなりま

す。著者についてよく知ることは大事ですが、神聖視したり、極端に美化することは、読者の思い込みを生じ、著者の真意を正しく受け止める妨げになりかねません。

著者への思い入れが強すぎると、読み手の「たましい」の発動が盲目的になってしまいうのです。とはいえ先入見をすべて排除するのは不可能ですから、つとめて虚心坦懐に『某』に臨むことを心がけましょう。

第二には、「いま・ここ」の読み方をする事。

一冊の本を、暗記するぐらい何度も読むのは素晴らしい勉強法なのですが、ここにも落とし穴があります。人の脳の機能には、すでに知っている事柄や、記憶として残っている文章に対して、感性の純度を鈍らせる傾向があるのです。

「ああ、これ知ってる」

「ここは前に読んだことがある」

その思いが強いと、いま・ここで書物と対峙している自分が知性の力で過去に引きつけられてしまい、フレッシュな感性のパワーが弱まらざるをえません。

この現象は、文字面だけを追った浅い読み方しかしていない人に多く見受けられます。〈たましい〉の成長にとって栄養となる読み方は、知識の量ではなく、その書物や文章か

らどのくらい大きな「共感」を味わったかにあるのです。

感動した本や、胸を打たれた文章に再び出会うと、以前のような感動や共感が呼び醒まされ、新たなパワーが注ぎ込まれます。もし感動が再来しないのならば、すでに感性が知性に負けているか、過去の感動が一時の気紛れにすぎないものだったのでしょうか。

「いま・ここ」の読み方をするためには、やはり虚心坦懐に、じっくりと腰を落ち着けて文章に接することです。ゆっくりと声に出して読むのもいいでしょう。むしろ、それが可能なだけの環境を整えることも必要です。

第三のポイントは、実践と結びつけた読み方すること。

かつて明の王陽明（王守仁）は「知行合一」を唱え、学問は実践に活かせる（活学）でなければならぬと力説しました。ギリシアのソクラテスも似たことを言ったと伝えられています。

純粹論理も実践を欠いては絵に描いた餅にすぎません。丸山敏雄は『葉』を知識の書ではなく、実践の書として著わしました。そのことは本文中に縷々述べられていますので、また改めて述べたいと思います。